

4. 追求テーマを生かしたまとめの工夫

— 「文化の違いを探ろう」を通して —

平野 謙 治

1. 講座の基盤

(1) 講座設定の理由

近年、科学技術のめざましい進歩により、世界中至る所の情報を瞬時に知ることができたり、また、実際にそれらの国々を容易に訪れることができるようになり、我々一般人のみならず、国家間の政治的、経済的なつながりや、文化的な交流も深まりつつある。これからの社会は、地球的規模で物や人の交流が行われていく時代であると言える。そして、現在、外国との相互依存、国際協力の重要性が高まり、国際的視野に立って、国際社会で活躍できる人材の育成が求められている。そのためには、生徒一人ひとりが、自国の文化や伝統についての理解を深め、新しい文化の創造、発展に尽くしていけるようにすることが大切であり、同時に、世界の国々や諸民族には、生活様式や風俗習慣を含めて固有の歴史や文化があることを理解して、それらを尊重する態度を育てることが大切であると言われている。今、それぞれの学校では、国際理解教育が実践されているが、その主な目標を挙げてみると次のとおりである。

- ① 異文化間の相互理解を進める。
- ② 多様な見方、考え方を育てる。
- ③ 表現力を育てる。
- ④ 人権尊重の精神を養う。
- ⑤ 社会連帯意識を育てる。
- ⑥ 異文化間コミュニケーション能力を育てる。

このほかにも目標が考えられると思うが、何よりも相手を認めあい、自他の人権を尊重する態度を育てることが大切ではないだろうか。

ところで、様々な国と交流していく上で、その国を知ろうと思えば、その国の文化や言語を知らなければならない。とりわけ、人々の考え方や生き方は、その背景として存在する、それぞれの国において、長年培われた独自の文化や習慣を理解することなしには考えられない。「外国へ行って、現地の人と話してみたい」「外国の人はどんな物を食べているのだろう」等、外国のことについて関心を持っている生徒は多いが、教科学習では、時間的にも制限されるため、表面的な知識理解に

とどまっている傾向がある。そこで、国際理解教育の一環として、生徒たち自らが設定したテーマに基づき、その国の文化を探り、自分たちとは違った文化を知ることによって、違いを認めようとする心を育てることをねらい、本講座を設定した。

(2) 学習活動の工夫

一口に文化と言っても、様々なジャンルがあるが、本講座では、人々の生活に最も密着していると言える食文化を共通のテーマとし、それぞれ生徒たちが調べたい国の食文化について追求することとした。食文化は生徒たちが最も興味を持っていて、取り組みやすいジャンルであり、またその中でも様々な内容を含んでいると思う。学習を始める前に次のような点を確認した。

- ① できるだけ現地の人から情報を得る。
- ② 体験を取り入れる。
- ③ 一人で学習するより、グループで協力した方が効果的な場合は、協力して行う。
- ④ 調べたい内容(追求テーマ)をはっきりさせる。

上記のような点を意識しながら学習を進めていった結果、実際に外国の方にその国の食べ物や食事のマナーを聞いたり、あるいは、グループでその国の料理を実際に作ってみた生徒もいた。

2. 目 標

ね ら い (最終達成概念)	他国の文化を理解することを通して、自国の文化を見直すと共に、違いを認めようとする心を育てる。
友達の見方の違いや自己の見方の変化に気づく。	自文化理解 日本には日本独自の食べ物や食習慣があり、また人によってそれらに対する見方、考え方に違いが見られることに気づく。
社会や異世代の人々(対象)の見方の違いや共通性に気づく。	他文化理解 他国の食文化に関する様々な情報を集めることによって、自国の食文化との違いに気づく。

自分、友達、対象者の見方や考え方をまとめ、自分の生き方を見つけることの大切さに気づく。

他国を知ることは、即ち自国を知ること、同時に他国の違いを認め尊重することは、即ち自国も理解され尊重されることにつながる。違いを認め、多様な見方・考え方を育てる。

3. 追求テーマを生かした学習の実際

ガイダンス、オリエンテーションの後、いろいろな国の食文化を共通テーマとし、19名（留学生デレックを含む）の生徒それぞれが次のような具体的な追求課題を設定した。

名前	国名	追求課題
A子	アメリカ	食事のマナー
B子	イギリス	家庭料理、食生活の習慣
C男	オーストラリア	普通生活や祭事の食事
D子	インド	行事の時の食べ物
E子	オーストラリア	アボリジニーの今と昔の食べ物
F子	韓国	食事のマナー、日本食との関わり
G子	ドイツ	主食とその背景、飲み物
H子	エジプト	古代エジプトの食べ物屋台
I子	ロシア	主食、スープ、酒
J子	インド	インドのカレー、香辛料
K子	インド	普段の食事、飲み物、香辛料
L子	インド	香辛料の歴史
M子	インド	香辛料、一日の食事
N男	イギリス	家庭料理、食事の作法
O男	イギリス	食事に対する考え方
デレ	日本	侍
P子	オーストラリア	1日の食事、独自の食べ物、お菓子
Q子	アメリカ	お店、お菓子、日本食、病気の時の食べ物
R子	オーストラリア	代表的な食べ物、水、おやつ

以上のようなテーマを決め、資料を集めに図書館へ行ったり、実際に香辛料からカレーを作ったり、また以前お世話になったオーストラリアのホストファミリーから資料を送ってもらったりして、調査を進めていった。オーストラリアに関しては、留学生のデレックから、しばしば適切なアドバイスをもらっていた。

次にカレーを作った生徒たちの感想を紹介する。

全部最初から最後まで自分たちで作って、インド式の作り方で作って、インド料理を味わえた。味はともかく、作ることに意義があったと思う。

ルーまで自分たちで作ったけど、本当に大変でした。インドの人達の苦勞が少しは分かった気がします。

インドにはインド独特のカレーがあって、日本人の口にはとても合わないけど、それを「まずい」とせず、「インドの味」というふうに考えていった方がいいと思う。



オーストラリアのお菓子について調べていた生徒は、オーストラリアのホストファミリーから実際にいろいろなお菓子を送ってもらい、講座内発表会の時全員が試食させてもらった。お菓子一つを取ってみても、日本との違いを実感したようだった。

講座内発表会では、OHP、プリント、模造紙等を使って、様々な国の食文化について、興味深い発表がなされた。どうしても欧米に目が向きがちであるが、今回特に韓国やエジプト、インド等あまり知られていない国についての発表が目をつけた。また、食文化を調べていくうちに、その国

の歴史に言及せざるを得なかったという生徒が多く見られた。ドイツを調べた生徒は、次のような感想を述べている。

ドイツ料理は質素と言われるが、いろいろな国の影響を受けているので、その一部の地方だけでも、とても強い特色を持っていて、日本のように大陸から離れた国にはないおもしろさがあった。料理にもその国の歴史が伺えるようなところが多々あり、調べてみる価値があった。

4. 学習の成果と課題

本講座の目標の一つは、様々な国の食文化を調べることを通して、違いを認める心を育てる、言いかえれば、人権尊重の精神を育てることであった。この目標がどの程度達成できたか、二人の生徒のイメージマップを通して見てみよう。

「国際理解」という言葉を聞いたとき、浮かんた言葉を書かせたところ、総合学習をする前と後で、次のような変容が見られた。

(A子の場合)

事前……外国、文通、外人との交流、たくさん
の文化



事後……外国語、人権尊重、異文化、外国

総合学習の前には、「国際理解」をただ漠然と外国人との交流とか、身近な文通などというイメージしかなかったものが、事後には異文化という自分たちとは異なる文化を認識し、また人権尊重という心の面まで高まっているのが分かる。

(N男の場合)

事前……外国、文化、世界



事後……外国、文化、人種

また、N男の場合は、外国、文化は変わっていないが、学習後、漠然とした世界から人種という言葉に変わっており、人に目が向けられていることが分かる。N男は、学習後の感想で、国際理解のイメージについて、「文化の違いを理解しあって、お互いを認めあい、中国人は嫌いだとか、そう言ったことのないようにできること。つまり、くだらない先入観をなくすことだと思う。」と述

べている。

本講座のねらいの一つに「違いを認める心を育てる」があったが、「お互いを認めあい…」という言葉の中に人権を尊重しようとするB男の気持ちが表れているように思う。

次に学習を終えた後の感想を、レポートやガイドブックから拾ってみよう。

私はこの学習をして、とても大切なことを学んだ。私は実際にスパイスからカレーを作ったことがあったが、日本で作ったカレーとあまりにも味が違っていた。私はこのようにインドのカレーの味はこうだと決めつけて偏見を持っていた。私たちはこのように思いっきり知ったふりをしてきた。これから国際社会となっていく中、私達は偏見を捨て、もっともっと多くのことを知っていかなければならない。そのためには、その国のことを理解し、おたがいに尊重していく必要があると思う。(K子)

イギリスは、よく聞く外国名です。だから私は、その国のことを理解していると勘違いしていました。調べてみると、私の頭の中のイギリスとはまるで違っていました。私たちが国際理解をする上で、一番重要なことは、先入観を捨てること、相手の文化を理解し、日本が常識だと思いたまえないことです。これからどんどん盛んになる国際交流、一つでも多くの国の文化を理解していきたいです。(B子)

結構充実した調査ができて良かった。他の国を理解する、いわゆる国際理解というのは、お互いの先入観をなくし、確実な情報を手に入れることが大切だと思う。僕も今回、知っているふりをして、実は知らないというものがあったので、これからはもっと視野を広げて、物事を見ていきたいと思った。(C男)

イギリスの文化を調べ、様々な新しいことを知れて良かったです。日本と比較していくと、日本の文化の知らない面がたくさんあったので、以外と自分たちのことを知らないんだなあと思いました。この学習をして、国際交流というのが、他の国のことを知ることだ

けでなく、自分の国のことを知ることにも国際交流になるということが分かりました。(O男)

この総合学習を通して、生徒たちは様々なことを学んでいる。K子は、「私たちは偏見を捨て、お互いを尊重しなければならない」ということを学んでおり、また、B子やC男は、偏見を持たない、即ち固定観念で物事を見てはいけなと感じている。そして、O男のように、他国の文化を調べていく中で、自国の文化をいかに知らなかったかを実感し、自国を知ることにも国際交流の基礎になることを学んでいる。このように当初の目標以外のことにも、生徒たちは気づいたり、実感したりしたことは大きな収穫であった。

今後の課題としては、資料や情報を得る人が少なかったため、もう少したくさんの人や資料から多角的に追求できればよいと思う。そのためには、インターネット等を使って世界の情報を利用したり、在住の外国人のリストを整備することが大切である。また、食文化といっても、様々な内容が考えられるので、さらに絞って調べてみるのも一つの方法である。そして、今回の学習のなかでも生徒たちが実感したことではあるが、歴史的背景との関わりの中で食文化を追求していくことも今後の課題としたい。

(ひらの けんじ・英語科／現在は邑智町立粕淵小学校教頭)